

\* 登場人物◇

高坂健吾(25) ニセコ町で畑作を営む農家の長男だが、跡を継ぐ事に迷いを感じ、レストランでアルバイトをしている。友だちに対して引け目を感じていている。

篠田 実(9) 福島で震災に遭い、夏休みを利用して妊娠中の母親と共に、ニセコ町の祖父母の家に来ている。大人のような言葉遣いをする。無邪気な子どもらしさは感じられない。

高坂健司(54) 健吾の父親。代々農業を営んでいる。無口で不器用。

高坂しのぶ(53) 健吾の母親。健吾の将来を心配している。

篠田美由紀(32) 実の母親。23の時に結婚、翌年実を出産するが、28の時に離婚。31で再婚し、現在妊娠中。実を連れて、ニセコ町の実家に里帰りしている。  
\*登場場面は、実の胸によみがえる声にて。

山崎拓也(25) 健吾の同級生。札幌の有名企業に勤めている。

山崎奈央(25) 同じく健吾の同級生。拓也の妻で、妊娠中。健吾のかつての憧れの人。

旧姓原田。

田中洋子(75) ニセコアンヌプリの麓でペンションを営んでいる。夫に先立たれ、息子は独立していて、一人で暮らしている。快活で面倒見が良い。

\*露店の客||母親と子供たち姉妹  
櫻井弘子(38) 二人の娘は小学校高学年に。夫はニセコ町内で、会社勤めをしている。

櫻井亜美(10) 小学5年生  
櫻井亜美(9) 小学4年生

鳥越純平(45) 露店の店主。地元のイベントでは、顔なじみの名物おっさん。

\* あらすじ

レストランで働いている健吾。そこへかつての同級生・山崎夫婦がやって来る。幸せそうな二人と、境遇に差を感じ、落ち込む健吾。帰宅した健吾は両親と諍い、自宅の軽トラで家を飛び出す。

乱暴な運転で危うく少年とぶつかりそうになる。うずくまっていた実との出逢いである。「福島」から来たという実。その実から神さまを探している事を聞き、健吾は一緒に行くことにする。

狩太神社の夏祭りに訪れた健吾と実は、安

「夜明けの神さま」

高橋 舞

(ラジオニセコ開局記念スペシャルドラマ  
ラジオニセコ放送劇団・第一回制作作  
・2012年10月8日・放送)

産祈願のお守りをきつかけに喧嘩となり、はぐれてしまう。実を保護してくれた年配のおばさん(洋子)は、二人を、自身が営むペンションに泊める。

洋子から神仙沼の話聞いた二人は、未明、沼へ向かう。そこで表面からはうかがい知れなかった二人の、それぞれの迷いと悩み、胸の内にある本音が吐露される。  
辿り着いた沼。水面を日の出が輝かせ、森から母馬と子馬が現れる。神さまだろうか…いや化身か…感動する二人。

旅を終えた二人は地元に戻り、それぞれに人生の新たな一步を踏み出していく。

\*オープニング

狩太神社の祭り。境内の朝。(現地録音にて)

SE 大太鼓く神主の祝詞(「ニセコの山に」の言葉が入る)く笛く  
奴歩きの掛け声と足音響くー

\*タイトル(声)

ラジオニセコ開局記念ドラマ  
ラジオニセコ放送劇団 第一回作品

「夜明けの神さま」

SE レストランの喧騒。

ドアが開閉し、カウベルが鳴る。

健吾(25) 「いらっしやいませ…あつ」

奈央(25) 「あれ…高坂くん？」

健吾(語り) 「バイト先の店に、かつての同級

生・原田奈央と山崎拓也がやってきた」

拓也(25) 「よお健吾、久しぶり！」

健吾(語り) 「奈央は昔の面影を残したまま更にきれいになっていて、拓也の身体は日に焼けて逞しく、笑顔には自信が溢れている。

二人が、目の前で仲良く寄り添っているのを俺はぼんやりと見つめていた」

拓也「元気だったか？」

健吾「あ、ああ。…お祭りだから、一緒に帰

ってきたのか？」

拓也「ああ…結婚したんだ、俺たち」

健吾「えっ…」

奈央「でもね、式とかは挙げてないのよ。籍

入れただけ」

健吾(語り) 「奈央は自分のお腹に手をあて、いたずらつ子のような表情を見せる。俺は、彼女のお腹の微かな膨らみによく気がついた」

拓也「ま、そういう訳で、ばたばたしてんだ。悪い」

健吾「…おめでどう」

奈央「ありがとう」

健吾(語り) 「照れ臭そうに、けどとても幸福そうに笑う二人。一瞬、全く知らない人達の様に見えた」

拓也「しばらくこっちにいるからさ。これ、俺の連絡先な」

健吾「ああ…」

拓也「じゃあな」

SE レストランの喧騒。

健吾(語り) 「渡された名刺には札幌の有名企業の名前が印刷されていて、俺は急速に疲労を覚えた。…惨めだった」

喧騒が次第に小さくなる。

健吾(語り) 「アルバイトを終えて家に帰ると、畑からあがってきた母さん(しのぶ)が興奮した様子で待っていた」

しのぶ(53) 「お帰り！さっきね、拓也くんと奈央ちゃんに会ったのよ！結婚したん

ですって！しかも奈央ちゃん妊娠してたのよ、お母さんびっくりしちやった。でも拓也くんも立派にお勤めしてるんだから安心よねえ。あ、うちのメロン少し持っていってもらったんだよ。ちようど出荷する前だったから」

SE 健吾、乱暴に壁を叩く。

しのぶ「何、びっくりするでしょう」

健吾「どうせ俺は出来損ないだよ」

しのぶ「そんな事言っただけでしょう、お母さんはただ…」

健吾「あてつけにしか聞こえないんだよ！」

SE 乱暴に足音をたてて立ち去る健吾。エンジンをふかし、車が走り去る。

健司(54)「あの馬鹿、軽トラ乗って行ったのか」

しのぶ「あ、お父さん。どうするの、あの車修理に出すところだったんでしょ？」

健司「しばらくほっとけ。そのうち何処かで立ち往生するさ」

SE 虫の音、車の激しい振動音がかぶる。

健吾「…あつちい…このボロ車！…危ねっ」

SE 軽トラ、急ブレーキ。

健吾(語り)「突然、目の前に少年が現れた。

直前にかわせたのでぶつかりはしなかったが、少年は蹲ったまま動かない。脇には、携帯電話が転がっている。急いで車を降り、ぐったりした身体を支えろと」

実(9)「水…水をください」

SE 缶を開ける(健吾)。

健吾「ほら」

実「ありがとうございます」

健吾(語り)「俺は少年を車に乗せて、飲み物を買いに走った。名前は篠田実といい、9

歳であると言った」

健吾「大丈夫か？親とか、連絡したら」

実「平気です。…あの、お兄さん…」

健吾「お兄さん？お、俺は健吾っていうんだ」

実「すみません、あの健吾さんは、何処かに

行く所だったのでは」

健吾「ああ…まあな」

実「あの、途中まで乗せていただけませんか」

健吾「どこに行きたいんだ？」

実「…驚きませんか」

健吾(語り)「実は、重大な秘密を告げる時の

様に身を乗り出した」

実「…神さまのいる所です」

健吾「…どこにいるんだよ」

実「わかりません。今、探しているところで

す」

健吾「そう言われても、なあ。…うちの人は？何も言わないで出てきたのか？」

実「僕の家は福島です」

健吾「フクシマ？…そうか…大変なんだ」

実「それで、お母さんに赤ちゃんが生まれるので、一緒にニセコのおばあちゃんの家に来ているのです」

健吾「そうか、うん、それがいいよ」

実「おばあちゃんには今朝『本当のお父さんに会いに行く』と置手紙を頂きました。

僕が5歳の時、お父さんとお母さんは離婚して、だけど去年お母さんは再婚したので、

戸籍上の父親は福島に残っていて、本当のお父さんはこっちに居るんです」

健吾「…なんか色々やこしいな」

実「とにかく、騒ぎにならないよう手は打っ

てきているという事です。お母さんは今具合が悪くて病院にいて、心配をかけてはい

けないので」

健吾「なるほど。それで無事に赤ちゃんが産

まれるよう神さまにお願いしに行くってわけか」

実「…まあ、そのようなものです」

健吾「神さまに頼めば何でも叶えてくれるわけ？」

実「…そう信じています」

健吾(語り)「直向さは鬱陶しくすらあったが、その一言は妙に俺の胸に響いた。…それに、

どうせ自分だっただけどこに行く当てもないの

だ」

健吾「…信じるものは救われる…か」

実「え？」

健吾「俺も付き合うよ」

SE 虫の音に、軽トラの走る音が重なる。

健吾(語り)「どれだけ走っただろうか。太陽はすっかり高くなっていった」

SE 遠くでお囃子。響きが聞こえてくる。

実「なんですか？」

健吾「お祭りだよ。狩太神社の」

実「寄り道はだめですよ」

健吾「ちよつとくらい、いいだろ。神社には神さまがいるんだぞ」

実「えーっ…」

SE お囃子に、人々がざわめいている。

健吾(語り)「豊作を祈る夏祭りだった。この

辺りでは随分と規模の大きいものだ」

健吾「な、けっこう賑やかだろ」

実「(ため息)まったく」

SE ばたばたと走ってくる子供たち。

健吾(語り)「俺たちのすぐ脇を、小学生くらいの女の子たちが駆け抜けていった」

弘子(38)「ゆっくり行きなさい、ゆっくり！」

結衣(9)「待って、おねえちゃん」

亜美(10)「結衣遅い！お母さんも早く！」

結衣「待ってよ」

SE 露店、鉄板で焼きそばを焼いている。

純平(45)「いらつしやい！かわいいお嬢

ちゃん」

結衣「焼きそば、一つください！」

純平「妹と分けて食べるのかい？えらいねえ」

亜美「ううん、お父さんにおみやげ。今日お

仕事で来られなかったから」

結衣「お父さんねえ、焼きそば好きなんだよ」

純平「そうかい！孝行娘だねえ、お母さん」

弘子「ええ、まあ」

純平「それじゃ、腕によりをかけて作っちゃうよお！」

SE じゅうじゅうと焼ける焼きそば。

純平「お！その坊やも、焼きそば食べない？

お父さんに買ってもらいなよ！」

健吾「お父さんだつてよ」

実「うふっ……」

健吾(語り)「あちこちをひやかしながら歩いて、神社の本殿に行き着いた」

健吾「あ！お守りもあるぞ、買ってくか」

実「え……」

健吾(語り)「俺は意気揚々とお守りを買いに

走った。誇らしいといえは大げさだが、何かを成し遂げた様な達成感を久しぶりに味わっていた。しかし、戻ってくると実はさ

つきの場所と同じ様に立ちすくんでいる」

健吾「どうした？早くお願いしてこいよ」

実「…ここではできません」

健吾「なんでだよ？あ、お賽銭か？まったく

ようがねえな、これで…」

実「駄目です！」

SE 実、健吾の手をピシヤリと払いのける。

健吾(語り)「俺の手を振り払い、実はお守りを地面に投げつけた」

健吾「何すんだよ…何が気に入らないんだ？

ここでいいじゃねえか」

実「とにかく駄目なんです」

健吾「理由を言えよ。ちゃんと話さなきゃ

かんないだろ？」

実「…あなたには関係のない事です！」

健吾「…ああそうだよ、俺には何の関係もないよ。ここで解散だ、勝手にしろ」

健吾(語り)「俺は腹立ちまぎれに、一人で車

に戻った」

健吾「(あくび)…勝手にしろ…(寝息)」

SE お祭りの喧騒が遠のいていく。

健吾(語り)「目を覚ますと、日は傾いていた」  
健吾「…どこ行ったんだあいつ…」  
健吾(語り)「実が投げつけたお守りが目に入った。俺はそれを拾いあげ、人ごみの中を駆け出した」

SE 駆け出す健吾の靴音。

BGM 不安な曲調が靴音に重なる。

健吾「実！どこだー！みのるー！」  
洋子(75)「もしかして、あの子の事かい？」  
健吾(語り)「声を掛けてきたのは年配のおばさんだった。指差す先に、実が丸くなって眠っている」  
健吾「実！」  
洋子「相当疲れてたみたいだね。あんたお父さん？じゃないだろう」  
健吾「えっと…」  
健吾(語り)「言い淀むと、おばさんは何もかも知っている様な顔で言った」  
洋子「まあいいさ、とりあえず家においで」  
健吾「いえ、でも…」  
洋子「いいから。どこ行くあてもないんだろ」  
健吾「ありがとうございます。ほら、実」  
実「んんー」  
健吾「しよすがねえな…ほら…おも！」  
実「(寝ぼけて)おとうさん…」  
健吾「ったく…」  
健吾(語り)「おばさんは、アンヌプリの麓で

ペンションを営んでいると言った。それは丸太造りの山小屋風で、郵便受けには田中洋子と手書きの名前があり、傍らに畑が広がっていた。洋子さんは見ず知らずの実と俺を、すぐに湯気の立つ風呂場に放り込んでくれた」

SE 火が燃え、薪がパチパチとはぜる。

音

健吾「すげえな、五右衛門風呂だぜ」  
実「……」  
健吾「なあ…まだ怒ってるの？」  
実「……」  
健吾「悪かったよ、俺が何か気に障ることしたんだろ？」  
実「健吾さんは悪くない。悪いのは僕です」  
健吾「どういう意味？」  
実「……」  
健吾「なあ」  
実「健吾さん。…ごめんなさい」  
健吾「いいよもう。…じゃあ、仲直りな？」  
実「はい」  
健吾「よし、ちゃっちゃと入るぞ…熱ちっ」  
SE 風呂の湯が、はねる。  
実「健吾さん、それ確か、足でその板を押し下げて底に敷くんですよ」  
健吾「なんだよ、知ってたんなら教えろよ」

実「ふふふ」  
健吾「くそ、お前もこうしてやる！」

SE ざぶんと、激しく湯がはねる。

実「わー」  
健吾「ははは」

二人の笑い声が、風呂場に響く。

健吾(語り)「俺達が風呂から上がると、食事の用意ができていた」  
洋子「遠慮する事ないんだよ」  
健吾「だけでも日暮れだし…」  
実「僕達、神さまを探しているんです」  
健吾「実」  
実「あの、洋子さん」  
洋子「はは、おばさんでいいよお」  
実「あ、はい。あの、洋子おばさん…神さまのいる場所知りませんか」  
洋子「神さま？神さまねえ。ここから車で少し行ったところに神仙沼ってのがあんだけどねえ。神さまの神という漢字に、仙人が出るという仙の字を続けて…」  
実「神仙沼？」  
洋子「そう。だけど夜は暗くて危ないから、今夜はここに泊まって、明日にしよう」  
実「健吾さん、行ってみようよ。お願い」  
健吾「しよすがねえな…。それじゃすみません、お世話になります」

実「お世話になります！」

洋子「嫌だねえ、気にする事無いんだよ。ほら、たくさん食べなさい」

SE 柱時計が眠たげに鳴る。

健吾(語り)「料理はどれも素材で美味しく、疲れた身体に優しく染み渡った。洋子さんはいつの間にか和室に布団を二組敷いてくれている」

健吾「何から何まで、本当にすみません」

洋子「それはもう聞き飽きたよ。久しぶりのお客さんでこっちは嬉しいんだから気にしないで。おやすみ」

SE 襖が閉まる。

健吾「消すぞ」

実「うん」

SE 電灯を消す。

BGM

美由紀(32)「実。実：お兄ちゃんになるんだよ。嬉しい？弟かな、妹かな…。楽しんでみだね」

\*実の胸中に、母の篠田美由紀の声がよみがえる。美由紀は、遠くから実と呼びかけるように。

実「(すすり泣く)」

美由紀「実：ごめんね。お母さん、入院しなくちゃいけないようになったの。だけどだいじょうぶだから…。実も、少しの間、頑張れる？(エコー)」

実「(すすり泣き、とまる)」

健吾「…どうした、腹でも痛いのか」

実「なん…なんでもありません」

健吾(語り)「母親が恋しくなったのだろうか。大人びた振る舞いをしていても、実はまだ、たった9歳の子どものものだ」

健吾(語り)「きつと幾つもの夜をこうして過ごしてきたのだろう。小さな背中が頼りなかった。眠れないまま、暗い内に起き出した」

SE 木道を歩く健吾と実の靴音。

健吾(語り)「俺達は洋子さんのペンションをこっそり抜け出し、車を走らせた。神仙沼へは、そこから更に木道を歩いていかなかったはならなかった」

健吾「…もう夏も終わりだな」

実「…まだ8月なのに」

健吾「…北海道の夏は短いんだよ…」

健吾(語り)「夜明けを待つ空は薄青く、辺りは水の匂いで満ちている」

実「僕…本当は違うんだ」

健吾「…何が」

実「僕…赤ちゃんが産まれてこなければいいと思っただ」

健吾「どうして」

実「わかんない。みんなは喜ぶんだ。それで、よかったねえって言うの。だけど僕は嬉しくなかった」

健吾「うん」

実「お母さんがよくお腹に触らせてくれるんだよ。話しかけてごらんって言うの。ちゃんと聞いているからって。それで僕、赤ちゃんに話しかけたの。声は出してないよ。心の中だけ」

健吾「うん」

実「それで…(泣き出す)お前なんか出てこなくていいって…そしたらお母さんの具合も悪くなった」

SE 風にざわめく樹々。

健吾(語り)「俺は黙って、実の手をとった。肩を震わせて、懸命に涙を拭う実は、かつての自分と同じ位無力で、今の自分と同じ位孤独だった」

健吾「大丈夫だよ」

実「(泣きじやくる)」

健吾「実のせいじゃない」

健吾(語り)「実の手は湿っぽく、熱い位だった。見上げた空にはぼつんと一つ、星が今にも消えそうに揺らめいていた。ああ、なんて頼りないんだろう…。だけど、…繋い

だ手から伝わる、この熱の確かさだけが、俺達をこの世界に留めて、明日へ向かわせる……」

健吾「行こう」

SE 二人の靴音、勢いづいている。

健吾(語り)「俺達は再び歩き出した。木道を

ひたすらに進んで、そして、ついに沼にた

どりついた」

健吾「気をつけろよ」

実「うん」

健吾「どこにいるんだろうな、神さまは」

実「神さまも眠ってるかも」

健吾「はは、そうかもな。…静かだな」

健吾(語り)「何もかも眠っているのか。俺は

妙に平らかな気持ちになっていた」

健吾「…俺さあ、レストランでバイトしてるんだ」

実「え？」

健吾「家は農家なんだけどさ。親は何も言わ

ねえんだ、それで。だけど、全く期待され

てないってのも虚しいもんだぜ。…って俺

が悪いんだけど。周り就職して結婚して

子ども作って…順調に人生歩んでるよ。…

だけど俺にはそれができない」

実「……」

健吾(語り)「その時、夜が明けた。太陽の光

が辺りを照らし、世界を輝かせた」

実「きれ……」

健吾(語り)「それは実際、この世のものとは

思えない位、素晴らしい眺めだった。水面

に映る樹々がやさしく風に揺れている」

実「健吾さん」

健吾「しっ」

健吾(語り)「ちょうど俺達の対岸に、一頭の

馬が姿を現した。全身が白く、まるで光を

放っているようだ。しなやかな身体は美し

く、頭をもたげて悠然と歩いている」

実「…あっ子馬も…いるっ」

健吾「白馬の親子だ」

BGM

健吾(語り)「親子は、暫く水を飲んだり草を

食んだりしていたが、やがて、再び森へと

姿を消した」

実「…か、神さまだったのかな」

健吾(語り)「そうかもしれないし、そうじゃ

ないかもしれない。俺は軽やかだった。こ

れからは何があっても、何も無くて大丈夫

夫。不思議と素直にそう思えた」

SE 朝の小鳥のさえずりが、二人を包む

様に降り注ぐ。

健吾「さあ、戻ろうか」

健吾(語り)「俺は、お守りを実に戻した。実

ももう、拒絶しなかった。実もきつと、あ

の時自分を許し、許されたのだ。洋子さん

は俺と実がいらないことに当然気がついていて、俺達が戻ると怖い顔をしてみせたが、すぐにおいしい朝ご飯を用意してくれた」

SE 軽トラのエンジンがかかる。

健吾「本当に、お世話になりました」

実「ありがとうございます。洋子おばさん」

洋子「よかったらまたおいで。それまで頑張

って、ここ、続けてるからさ」

SE エンジンをふかせて、車が走り出す。

健吾(語り)「帰り道、俺も実も無口だった。

実はずっと窓の外を見ていたし、俺も無駄

口を叩いたりしなかった。あの神仙沼でお

互いの心の淵を見せてしまった事への照れ

臭さもあつたし、もうすぐ訪れる別れへの

戸惑いもあった。俺達の帰るべき場所が近

づき、旅は終わろうとしていた」

健吾「ここでもいいのか？」

実「うん、すぐそこだから」

SE 軽トラ、停まる。

車のドアがあき、実が降りて閉める。

健吾「…じゃあな」

実「健吾さん、ありがとうございます」

健吾(語り)「そう言うとき実が駆け出した。一

度も振り返らない、実らしい潔さだった。

そして俺は、俺の進むべき道へと車を走らせた」

SE 軽トラのエンジン音、再び響く。

その振動音が、急に不規則になる

健吾(語り)「家の畑から手前百メートルという所でだった」

SE 軽トラ、ついに立てエンストする。

健吾「まじかよ」

健司「おう、やっぱり壊れたか」

健吾「あ、父さん」

健司「こうなると思ってたさ」

健吾「ごめん」

健司「ほら、車を降りてお前も押しなさい」

健吾「ああ。…父さん」

健司「ん？」

健吾「俺も畑手伝うよ」

健司「…そうか」

健吾「うん」

しのぶ「どこ行つてたの」

健吾「母さん」

しのぶ「心配してたんだよ。お父さんだって…」

…

健吾「ごめん」

しのぶ「まあ無事でよかったわ。あらあ、こ

こで止まっちゃったの？あはは…」

健司「確かに、惜しかったな、ははは」

SE 三人の笑い声が、明るく続く。

虫の声が一際高く重なって、遠のく。

健吾(語り)「それから数日後、これから札幌へ戻るという拓也達が、畑に寄ってくれた」

拓也「連絡しろって言ったのに」

健吾「悪い」

拓也「親父さんの跡、継ぐんだってな」

健吾「ああ」

奈央「おばさん、すごく嬉しそうだったよ」

健吾「ちつ余計なこと言つて…」

拓也「また来るから、そんな時には絶対時間と

れよな」

健吾「元気で」

奈央「うん、健吾くんも」

SE 車が走り去る。

携帯の着信音が鳴る。

健吾「お、実からメールだ」

BGM (実のメール文の読みに重なる)

実「健吾さんお元気ですか。僕は、昨日福島

の避難先に戻りました。赤ちゃんもお母さん

も元気です。健吾さんも体に気をつけて、

おいしい野菜を作ってください。実」

健吾「っし」

健吾(語り)「携帯をポケットに押し込み、俺

は畑へと駆け出す。これからも俺達は、こ

の世界で生きていなくてはならない。だけど、あの小さな旅で見た光景の一つ一つが、いつかまた俺達に勇気や微笑みを与えてくれるかもしれない」

健司「おーい、健吾、こっち手伝つてくれ」

SE トラクターのエンジン音が畑に響く。

健吾(語り)「そうだ、実と実の家族に、いつか山ほどの野菜を送つてやろう。その思いつきは俺をにやつさせる。一步ごと踏み出す足に力が入り、見上げた空からは、太陽の光が燦々と降り注いでいた」

BGM 盛り上がり〜F・O。

\*あと枠 (NA) 声の出演

ニセコの青年・健吾

フクシマから来た少年・実 (宝積公士)

実の母・美由紀 (佐々木琴音)

健吾の父・健司 (前原光紀)

同 母・しのぶ (加藤 淳)

健吾の同級生・拓也 (空 純光)

同・拓也の妻 (小野剛良)

ペンションのおばさん・洋子 (佐竹愛美)

露店にやって来た親子連れ (吉川洋子)

母親・弘子 (木原くみこ)

長女・亜美 (高久真有)

二女・結衣  
露店のおじさん・純平

(秋元麻椰)  
(宮川博之)

制作統括 木原くみこ

原作・脚本 高橋 舞

録音・編集 宮川博之

音楽・効果 竹内祥子

制作技術 杉澤洋樹

演出助手 渡辺 豪

演出 菊地 寛

制作協力 北海道ラジオの会

制作・著作 ラジオニセコ

\*前枠・あと枠のNAII

「ご案内は、竹内祥子でした」

(終)